



聖書の文学2

シリーズ・日本人と聖書

第19回

三浦 綾子



- 日本人の好きな作家第7位
〈読売新聞のアンケート〉
- 数々病気と闘いながら、夫、三浦光世さんとの二人三脚で、83の小説・随筆・エッセー集を執筆
- 北海道旭川の街を愛し、生涯この街を離れず、1999年10月、77歳で天国に旅立った

経歴

1922年，北海道旭川生まれ

1939年，旭川市立高等女学校卒業。その後7年間小学校教員を勤める

1946年，西中一郎と婚約。6月肺結核を発病

1948年，結核で前川正と再会。その後、千通にも及ぶ書簡の往復が始まる

1949年，婚約解消。自殺未遂

1952年，脊椎カリエス発病。病床で受洗

1954年，前川正死去。一年間人に会わず

1959年，三浦光世と結婚

1961年，『主婦の友』募集の「婦人の書いた
実話」に『太陽は再び没せず』を投稿し入選

1963年，朝日新聞社の一千万円懸賞小説公
募に、小説『氷点』を投稿。これに入選し、翌
年12月より朝日新聞朝刊に連載

1966年，『塩狩峠』を「信徒の友」に連載。『ひ
つじが丘』刊行。『道ありき』連載開始・・・

作品

- 氷点 続・氷点 泥流地帯 続・泥流地帯
塩狩峠 銃口 細川ガラシャ夫人 千利
休とその妻たち 海嶺 残像 白き冬日
ちいろば先生物語 天北原野 毒麦の季
ひつじが丘 われ弱ければ一矢嶋楫子伝
難病日記
- 永遠のことば 旧約聖書入門 新約聖書
入門 他多数

主な作品の内容

- 『氷点・続／氷点』
 - 妻への屈折した憎しみと、「汝の敵を愛せよ」という教えの挑戦とで殺人犯の娘を養女にした医師。彼らの人間模様を軸に、人間にとって原罪とは何かを追求した不朽の名作
 - 「たった一人でもいい、この小説を読んでもらえるなら。そして人間がだれも持っている“罪”の意味を理解してもらえるなら・・・という気持ちで私は『氷点』を書いた。いわばこの小説は私の信仰の証しなのである。」

- 『塩狩峠』

- 自らの命を犠牲にして暴走した客車を止め、乗客の命を救った鉄道職員永野信夫の実話をもとに、一クリスチャン青年の愛と信仰に貫かれた生涯を描いた

- 『細川ガラシャ夫人』

- 織田信長の命令で細川忠興のもとに嫁いだ明智光秀の娘玉子。女性が男性の所有物でしかなく、政略の道具として使われた時代に、玉子は真の人間らしい生き方を求めて行く…。実の親子も殺し合う戦国の世にあって、愛と信仰に殉じた細川ガラシャ夫人

三浦綾子のメッセージ

• 愛と赦し

- 人が死んだ後にのこるのは、その人が何を得たかではなくて何を与えたかである。〈氷点〉
- 愛とは、自分の最も大事なもの(命)を人にやっってしまうことでもあります。〈塩狩峠〉
- 愛がわかれば、幸福がわかるかもしれない。〈残像〉
- 愛とは人を幸せにする意志〈新しき鍵〉

三浦綾子のメッセージ

- 苦しみを糧に
 - こんなに多くの病気にかかって、神様は自分をえこひいきしているのではないかと思います。〈インタビュー〉
 - 苦難に会った時に、それを災難と思って歎くか、試練だと思って奮い立つか、その受けとめ方が大事なのではないでしょうか〈続泥流地帯〉
 - 誰しもが、様々な苦しさ、むなしさに陥らざるを得ないのだ。そのことを、腹の底からよくみとめた時、わたしたちは、「虚無の隣りに神がいる」ことを、知り得るのではないだろうか。〈光あるうちに〉

三浦綾子のメッセージ

- 本当の生き方

- ぼくは有名にならなくてもええ、金持ちにならなくてもええ、けど、人の心を打つような、本気の生き方をしたい、そう思いました。〈ちいろば先生〉
- 真剣とは、人のために生きる時にのみ使われる言葉でなければならない。〈道ありき〉
- 「**あなたがたは地の塩である。**」
〈よく色紙に書いた言葉・マタイ5:13〉